©琉球新報　2016年03月31日　朝刊28面　記事数：1/1　<1/1枚>
希望この手に　沖縄の貧困・子どものいま＝第２部（１５）　離島から進学（第２部おわり）

希望この手に
沖縄の貧困・子どものいま

離島から進学

第2部 ⑮

仕事掛け持ちも生活困窮
お金ないから夢断念

離島の高校を卒業し、東京で就職した少女。「成長したい」と決意を語った

自然豊かな離島で生まれ育った少女(18)はこの春、高校卒業を機にふるさとを巣立った。東京にある小売業の大手企業に就職するためだ。「本当はウエディングプランナーになりたくて、本島の専門学校に行きたかった。でも親からは『お金が掛かるから、専門学校はやめてくれ』って言われていた。夢も何だか分からなくなった」

高校の3年間、バイトをしてきた。昼間の観光施設と夜の居酒屋の掛け持ちだ。「校納金や携帯電話代、資格や車の免許を取るための費用に充てた」。返ってこないと分かりつつ、親に貸すこともあった。

観光施設は時給680円。最低賃金が693円に改定された昨年10月以降も変わらなかった。居酒屋は700円。「島ではすごく良い給料」と話す。しかし、客が少ないと帰るように言われるため安定しない。客からカラオケを強要されたり、電話番号の交換を強いられて酔っ払った男から電話がかかってきたりしたこともある。

両親も働いている。父はサービス業に従事、母は昼は会社、夜はスナックの掛け持ちだ。同じ店に10年ほど勤めている父は責任ある役職名が付いているが、賃金は上がらないと聞いている。ほとんどが住宅ローンの返済に消える。

母は仕事の掛け持ちで体を壊し、夜の仕事を辞めたこともあった。しかし「生活できない」と再び働き始めた。それでも給料は税金などを引いたら、少女のバイト代より少ないと聞いた。進学に向けて、奨学金も考えたが「卒業後の返済を考えると無理。他のきょうだいもいるから」。最終的に就職を選んだ。

3月下旬に上京した少女は今、企業が提供する寮に住んでいる。「4人の相部屋で、全員が沖縄の人だから安心した」。東京は人の多さや電車での移動など慣れないことばかりだ。それでも「成長したい。仕事に対してわくわくしている」と未来を見据えている。

◇　◇

沖縄公庫の2014年度の教育資金利用者（2044件、うち離島433件）を対象にした調査では、学生1人当たりの入学費用は沖縄全体で148万9千円だが、離島は169万5千円と高い。特に離島の人には居住費負担が大きく、在学費用も同様な理由で高くなっている。

進学・在学先別に平均世帯収入を見ると、沖縄全体で大学進学者の平均世帯収入は415万5千円、離島居住者は365万4千円だった。進学に費用が高い一方で、収入は低いという離島の厳しさを映し出した。

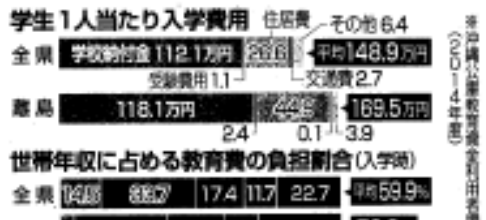
世帯収入に占める入学費用の割合は沖縄全体が平均59・9%であるのに対し、離島は平均70・9%で11・0ポイント高い。離島では「80%以上」も3割いて、過重な負担が浮き彫りになった。

ある離島高校の進路相談職員は「毎年進学が決まった段階で『払えない』と就職に切り替える生徒が4、5人いる」と話す。就職を決めながらも「本当は進学したかった」と明かす生徒も多いという。

県子どもの貧困対策に関する検討会委員長を務めた山入端津由沖縄国際大教授は「10代から20代初めは、その後社会で生きる上で大切な成長過程。進学が親の努力に委ねられるのでは無理がある。社会的な投資として、もっと教育に投資するべきだ。教育の中で、貧困対策としてできることを考えるべきだ」と指摘している。

（子どもの貧困取材班）

（第2部おわり）



※沖縄公庫教育資金利用者調査（2014年度）

情報やご意見をお寄せください。
文化部生活班 ☎098(865)5162　社会部 ☎(865)5158
seikatu@ryukyushimpo.co.jp
FB「チームいしがんとう」で発信中